

2023
Aug

今知りたい、頑張る生産者の情報フリーペーパー

となりの農家さん

take
free

特集

スペシャルインタビュー

栃木県 野口いちご園

目に見えない根へのこだわり



野口いちご園

野口一樹

注目の 若手いちご生産者

日本一のいちご生産量を誇る「いちご王国」栃木県の中でも、最もいちご生産量が多く、2023年にいちご王国「首都」を宣言したのが真岡（もおか）市である。その真岡市でトップ3に入るほどの規模でいちごを生産しているのが野口一樹（43）である。野口は就農10年に満たない2021年に新品種や新技術の導入、地域への貢献などの取り組みによって、県農業大賞県知事賞を受賞した。また日本を代表する大企業との最先端の共同研究を行うなど、近年注目されている若手のいちご生産者である。

塾の経営者から いちご生産者へ

野口の家は代々続く農家であり、父親の代からいちご生産を本格的に始めた。野口によると、父親は当時この地域ではほとんど生産されていなかった夏いちご「なつおとめ」の生産を始め、いちごの周年栽培を実現するなど、かなりのいちご生産の

腕前だった。そして地元JAのいちご部会の会長も務めるなど地域からの信頼も厚かった。

そんないちご農家の長男であった野口は、小さいころから漠然と「いずれは父親の跡を継ぐのだろう」という気持ちを持っていたものの、農業以外の仕事も知っておく必要があると考え、福島大学の教育学部を卒業後、福島市内で同僚と学習塾の共同経営を始めた。

数年が経ち、徐々に生徒が増え、経営が軌道に乗りつつあった2011年、東日本大震災が発生した。塾の経営を始めて5年後のことであった。福島市は地震や津波の被害こそ大きくなかったものの、原発事故の影響で「福島産の農作物は食べられない」という風評被害に苦しんでいた。

現地にいた野口は「福島産だからと言ってすべての農作物が食べられない訳ではない」と複雑な気持ちを抱きつつ、**自分自身で安全・安心に食べられるものを作りたい**と思うようになった。また、当時父親が還暦に近づいており、父親が元気なうちにいちご生産の技術を学びた

いという想いも重なり、野口の心は『いずれは』父親の跡を継ぐ』から『できるだけ早く』父親の跡を継ぐ』に変わり、学習塾の生徒を送り出した2年後の2013年に地元真岡に戻り、いちご生産者としてのキャリアをスタートした。

下積み時代

父親の跡を継ぐという意気込みはあつても、当時の野口はいちご生産の素人。当初、父親が受け入れていた外国人研修生に頭を下げて教わらないと何もできないくらい、いちご作りを知らなかった。



いちご栽培用のハウス面積110アール

そこで、野口は「父親であっても、いちご作りに関しては師匠で自分は弟子。どんな厳しいことを言われても絶対に逆らわずにやろう」と心に誓った。ただ、職人肌の父親は厳しいなんてものではなかった。

例えば、ある時野口がトラクターで畝を上げていたところ、畝が曲がっていたのが気に入らなかつたのか、気が付いたら真後ろから父親がトラクターで作らたての畝を崩していた。また、定植時に植え方が少し違っていたため、全部抜いて植え直しをすることになったなどのエピソードは枚挙に暇がない。

教育学部を出て、実際に学生に勉強を教えていた野口にとつて、父親の「教える」は全く異なるやり方であり、周りの人からは「よく我慢できるな」と言われたくらいであった。しかし、野口は初めに誓った通り、一切文句を言わず、父親の技術を盗もうと、日々必死で父親からいちご生産の技術を学んだ。

父親から突然の経営譲渡

そのような過酷とも言える下積み時代を5年程経験した2018年、突然父親からいちご農園の経営を任せられることになった。父親が体を壊した訳でもなく、事前に匂わせることもなく、『突然』の譲渡であった。しかも、一般的には農園

経営を任せるといつても、サポートをしながら徐々に移行することが多いが、野口の父親は所有していたハウスをすべて野口に渡し、自身はわざわざ近くのハウスを借りて、新たに小規模でいちご生産を始めるなど、さつと経営から身を引いてしまったのだ。

経営を引き継いだ野口は、これまでの下積み時代とは違ったプレッシャーを抱えることになった。いくら自分が頑張っても、比較される対象は常に地域から認められていた父親。しかも、父親と同じような経営をしても同等と認めてくれない。父親ができなかったことができ

て初めて、周りは一人前として認めてくれる。

そんな中、野口が意識しようとしたのは、基本的に父親の路線を継承しつつも、「外に目を向ける」ことであった。

すなわち、これまでは販売や資材購入などあらゆることが農協主体であったが、野口は農協だけでなく、それ以外のチャンネルも活用しようと考えたのだ。さしあたっては、スーパーでの直販、農協で扱っていない資材の導入などを行った。

目に見えない根っこの大切さ

ただ、父親から譲渡されたいちご農園の経営は順調なスタートを切ることができなかった。譲渡された翌年の

2019年にはハウスで萎黄病と線虫が発生して根がやられてしまい、収量が大きく減ってしまったのだ。「外に目を向ける」と言っても、いちごを作れなければ元も子もない。病気や虫に根がやられるなんて、野口にとって就農以降初



ハウス内の栽培状況

めての経験だった。これまでとはちらかというところと草・花・実など目に見えるところを気にかけていたものの、目には見えない根っこを充実させないと収量が上がらないことを痛感した。

野口は根張りを促進できる資材を必死で探したものの、周りから勧められたものは試したことがあったものばかりで、使いづらいう上、効果が限られていた。そんな中、野口の「外に目を向ける」一環で資材等の相談をしていたいちご資材専門店の針生から「鉄力あぐりB12（以下、B12）」

という資材を紹介された。試してみたところ、B12は粒の大きさが揃っているため簡単に撒くことができ、根がしっかりと張ってほしい厳冬期まで根張り効果の持続期間が長かった。



野口が愛用している
鉄供給剤「鉄力あぐりB12」
植物に二価鉄を供給し、葉色改善や
根張り強化に効果的。

それ以来、野口はB12を使うハウスを徐々に増やし、現在では秋口の定植前にすべてのハウスにB12を手振りで畝立てをしていく。それをすることで、12月から1月の厳寒期の根張りがよくなることを実感している。

そういった経験をしたことで、**今の野口は目に見えない根をいかに張らせるかにこだわりを持っている。**しっかりと根が張ることによって、理想的な樹姿になり、おいしいいちごをたくさん収穫することができると。B12によって根

張りが安定した今となつては、冬場でも無加温、無電照でいちごを生産できるようになった。

いちごで 地域を活性化

野口は、現在外部パートナーとともに新しい取り組みに励んでいる。その一つが夏いちごの栽培である。先述の通り、夏いちごの栽培自体は父親の代に始められたが、野口はヤンマー社と共同で株の周りだけ空調管理するシステムを本格導入する試験を行つて、より大規模に、より安価に栽培できる技術の研究を行つている。それをするので、標高が高く夏が涼しい地域だけでなく、真岡市のような平地でも夏いちごの生産を増やすことができると考えている。

なぜ野口は、わざわざ新しい設備を導入してまで、夏いちごの生産を増やそうとしているのか？ 野口に聞くと「真岡はいちごの日本一の大産地にもかかわらず、夏にいちごがない（少ない）のは寂しい。真岡に來れ

ば、年中いつでもいちごがあると
思ってもらいたい、いちごで地域を活
性化したい」と言う。野口によ
ると、まだまだ真岡のいちごはポ
テンシャルを發揮しきれていない。
野口をはじめ、地域全体で真
岡のいちごのポテンシャルをどんど
ん引き出すことができれば、「い
ちご王国栃木の首都もおか」の
知名度もさらに高まるだろう。



野口が丹精込めて作った「とちあいか」

野口いちご園プロフィール

JAはが野所屬。栃木県真岡市でいちごの周年栽培を行つています。作付面積は約110アールで、とちあいか、とちひめ、スカイベリー、とちおとめ、なつおとめ、ミルキーベリーなど様々な品種の栽培を行っています。近年は、企業との共同研究を行い、新たな栽培システムの開発などにも取り組んでいます。また、地域の農業を盛り上げるため、JAはが野青壮年部長として、就農促進などの活動をしています。

鉄力あぐりB12

植物は鉄分が不足すると、葉緑素を作れず、葉っぱの色が黄色くなり、光合成が十分に行えなくなります。それは土耕でも水耕でも同じです。

一般的な資材の多くは肥料成分や微量要素がバランスよく配合されており、その中に鉄分も含まれています。しかし、それらの鉄分のほとんどは植物がそのまま吸収できない「三価鉄」です。植物は「三価鉄」を「二価鉄」にして吸収しますが、環境ストレスや成り疲れて弱つた時には「二価鉄」に変換できなくなります。

「鉄力あぐりB12」は3.5ミリの粒状で散布しやすく、いちご等作付け期間の長い作物に適しています。また、肥料成分が含まれておらず、現在の肥料設計を変えずにご使用いただくことが可能です。

葉色改善や根張り強化による活着促進、生育促進などの効果が期待できます。

植物の鉄分補給について詳しく知りたい方は
下のQRコードまたは「鉄力」で検索。

あとがき

野口は就農年数が短いながら積極的に新しいことを取り入れ、「1年中いちごを届けたい」という想いからいちごの周年栽培に挑戦する傍ら、就農促進にも励んでいます。それぞれの農家さんが持つストーリーを紹介することで「となりの農家さん」のことを少しでも知っていただき、少しでも農業生産のご参考になればと思っております。

